

東邦協会露西亜語学校の変遷と実態

朝井 佐智子

シベリア鉄道開通によりロシアは地理的に近い存在というだけではなく、最大の脅威になる隣国であった。この関心の高まりによって、東邦協会露西亜語学校は開校する。多彩な教員、充実したカリキュラムなど遜色のない語学校であり、東邦協会会員の協力、金銭的援助を受けたにもかかわらず、多くの卒業者を排出することなく、廃止されていく。それは、清や朝鮮の情勢が未だ不安定にあり、時代の要請が別の方向に進んだこと、東邦協会が掲げていた事業の目的と乖離していたという要因が相俟った結果であると考えられる。しかし、東邦協会が露西亜語学校を設立したということは、一時期にせよ、東邦協会の政策がロシア重視であったということを示すものである。

1. はじめに

1887（明治 20）年、ロシアが、ウラジオストクとサンクトペテルブルクを結ぶ全長 9300 km に及ぶシベリア鉄道の建設計画に着手したとの知らせが日本に飛び込んできた。明治新政府発足からわずか 20 年の日本にとって、欧米列強は未だ脅威であり、とりわけ北の隣国ロシアは、シベリア鉄道開通により更に地理的に近い存在となり、その反面最大の脅威になることは明らかであった。人々の視線が否が応でもロシアへと向けられ、関心の高まっていたのがこの時期であった。この関心にこたえるかのように、1892（明治 25）年 1 月に開校したのが、東邦協会露西亜語学校である。

東邦協会露西亜語学校のことは、新聞記事にも掲載され¹⁾、広く人材を募集し、多くの生徒が集まったロシア語教育機関であったにもかかわらず、あまり詳しくは知られてはおらず、また先行研究も見当たらない。政府の洋化政策と相まって、明治期の語学学校と言えば英・仏・独語が中心で、ロシア語はマイナーな語学であるというイメージが定着しているゆえか、ロシア語学校そのものの実態を扱った先行研究さえも、ほとんどと言ってよいほどなく²⁾、どのような実態であったのかは、従来の研究では全く明らかにされてこなかった分野である。

また運営母体である東邦協会に関しても、その所属会員の多さや会員の政治的役割の大きさから、各種書籍で登場の多い会であるにもかかわらず、東邦協会自体の研究となると少なく、安岡昭男「東邦協会の基礎的研究」³⁾、同「東邦協会と副島種臣」⁴⁾、と狭間直樹「初期アジア主義についての史的考察(5)」⁵⁾の論考以外皆無といってもよいのが現状である。

そこで、本論文は、東邦協会の露西亜語学校の実態を解明し、当時のロシア語学校がどのようなものであったかを明らかにしたいと考えている。それと同時に、この露西亜語学校が東邦協会の活動にどのような影響を与えたか、またどのような役割を担っていたかを詳述できればと考えている⁶⁾。

2. 露西亜語学校の母体 東邦協会に関して

露西亜語学校の創設母体となった東邦協会は、1891（明治24）年5月31日に発足した会である。『東邦協会報告』⁷⁾は、清国駐在経験もある陸軍軍人の小沢韶郎、国権主義者の福本誠、清国で貿易活動に従事していた白井新太郎らが発起人であり、事業は「地理、商況、兵制、殖民、国交、近世史、統計」を講究することであると掲載した。

発起者らの呼びかけに応じて東邦協会の会員となったものは、政治家、新聞記者、軍関係者、清国公使、朝鮮公使など、広範囲な属性から構成されていて、『東邦協会報告』第一号に掲載されている主な人物だけでも、後藤象二郎、近衛篤磨、板垣退助、伊藤巳代治、犬養毅など、多彩な顔ぶればかりである。月を重ねるに連れて会員は増加の一途をたどり、露西亜語学校成立時の1892（明治25）年1月には、525名の会員を数えることができ、巨大組織とも呼べるまで膨れ上がったのである⁸⁾。

このような多彩な会員を反映した結果であろう。東邦協会の機関紙『東邦協会報告』⁹⁾に寄せられる意見も様々である。朝鮮・支那・米国・豪州など太平洋諸国を網羅し、中にはニカラグアのような中南米国に関する記載までも見受けられる。また内容に関しても、軍事・貿易・地理など多岐に渡って分析されている。この多彩な掲載記事のなかでも顕著なのが、ロシアに関するものだ。抜粋すると、「露韓の関係并朝鮮図圖」（第2号）、「西比利亞鐵道に對する日本の開港場を論ず」（第9号）、「浦潮港通信（商業港撰定の件・西比利亞鑄道工事の現況）」（第14号）、「浦潮港通信」「露國義勇艦隊沿革」（第15号）、「浦潮港通信（八月三日發）」「浦潮港通信（八月十四日發）」「東洋の於る露西亜海軍の舉動」（第16号）、「露西亜の形勢 チャールス、ゲルク」（第16号）、「一西比利亞地方、行政、及兵備」（第22号）、「一露西亜ト東洋○韃靼東部」（第25号）、「一印度形勢論＝露英の關係」「一露領亞細亞軍隊配備并に英領印度軍隊配布畧」「一北太平洋漁獵に關する英露の新定條約」「一浦潮港明治廿五年中の商況概要」「一西伯利鐵道工事の現況」「一露國義勇艦隊記事一斑」（第27号）、「一海上權力の要素」「一魯國財政一斑」「一魯西亞軍陣事情」「一日露英米四國聯合會議太平洋北部漁獵權域を定むる盟約の必要」（第29号）、「一東邦韃靼、即西伯利亞東部漁業試行の一斑」「一東亞細亞に於る佛露兩國の海軍力」「一東邦に影響すへき露佛同盟の効果如何」「一經濟上及び軍畧上に及ぼすへき西伯利鐵道の効果一斑」（第34号）、「一亞細亞ニ於ル英、魯、清三國ノ關涉」（第35号）¹⁰⁾、相当短いスパンでロシアに関する記事が掲載されていることがわかる。東邦協会の性格上、朝鮮・支那の記事が多いであろうことは容易に推測し得る。しかし、ロシアに対しても東邦協会が相当に注目し、関心をよせていたことは、この記事の数からだけでも伺い知ることができるであろう。

もう一つ、東邦協会がロシアを注視していた事例として、1892（明治25）年2月20日、大石正巳が、一ツ橋帝国大学¹¹⁾講義室で行った、講演会をめぐる論争をあげることができる。大石正巳は「東洋に対する日本の經濟意見」という題で三時間半にわたって熱弁をふるい¹²⁾、その講演の中で、ロシアを罵倒し、ロシアの脅威を声高に主張したことに対して、当時、東邦協会の副会長の職にあった副島種臣¹³⁾と理事の稲垣満次郎が不快の念を表明したというものである¹⁴⁾。この件に関する本人たちの直接の弁はなく、新聞記事からのみしか推測するより他ないが、大石の講演に記者は、「魯國は我が商業の敵、平和の敵、□た文明の大敵なりとまで絶

叫したるは頗る痛快」と表現し、副島は「元來東邦協会は種々の分子より成立せるものなれば之が為に随分迷惑を人もあるべし」と表現した。ロシアの脅威を排除すべきか、ロシアの脅威を刺激しないようにするべきか、いずれもロシアの脅威に対するシグナルとしての表現には違いない。今となつては推測に過ぎないが、一つ確かなこととして言えるのは、東邦協会は、1892（明治25）年時点、ロシアに対して大変な配慮をしていたということである。

3. 創設の背景

1887（明治20）年のシベリア鉄道の開通により、朝鮮半島まで一気に南下する交通手段ができるという点で、ロシアが最大の脅威となることは誰の目にも明らかであった。この危機感に対して、山県有朋は、1890（明治23）年、第一帝国議会で、「国家が独立を維持するためには、固有の領土である主権線とその周囲に広がる利益線を守る必要がある。我が国にとっての利益線とは、朝鮮半島のことである。しかしシベリア鉄道が完成すれば朝鮮半島はロシアの軍事力の前に脅かされるだろう」と述べた¹⁵⁾。この山県発言の翌年1891（明治24）年5月、シベリア鉄道の極東地区起工式典に出席するため、ロシア皇太子のニコライ二世が日本に訪れた。大艦隊を率いての訪問と日本政府を挙げての歓迎を目の当たりにした人々の間に、さまざまな憶測が飛び交った。シベリア鉄道は、日本占領の第一歩であり、皇太子は、その下見をするためにやってきたというものである。津田三蔵によるロシア皇太子暗殺未遂事件、いわゆる大津事件¹⁶⁾は、「直ぐにでもロシアは報復してくる」という噂に拍車をかけ、更なるロシアに対する恐怖心をあおることになった。シベリア鉄道開設における一連の出来事は、良きにつけ悪しきにつけ、人々の関心がロシアへと向けられる契機になった。この時期に東邦協会露西亜語学校が開校したということは、このロシアへの関心への要請に応えるためということが第一の要因としてあったものと思われる。

もう一つの要因として、東京外国語学校が、1887（明治20）年に、東京商業学校（のちの高等商業学校。現、一橋大学）¹⁷⁾に吸収され、官立のロシア語教育機関が存在していなかったということもある。管見の及ぶ範囲内では、官立、私立にかかわらずロシア語教育機関は皆無であり、時代の要求に 대응できるロシア語学校を早急に設立する必要性が生じたのである。当然、官立学校の設立が短期間で設立されようもなく、私学校がその役割を担わざるを得ない状況になったのである。当時、東邦協会と並べ評される会として、「興亜会」¹⁸⁾が存在していたが、その名の通りはアジアとの連帯を目指す会でもあり、支那語・朝鮮語学校を設立することが自然の流れであり、現に支那語学校を併設していたということもあり、興亜会が新たな私学校を設立するということは考えにくい状況であった。

そして、当然の要因であるが東邦協会の意向が強く働いたということである。東邦協会がロシアに対して、大きな注意を払っていたことは前述した通りである。このロシアの脅威に対する意識を形にするため、そして発足から半年以上も経過し、当初の目的である、「本会は講究の附属として一の学館を設け本会の目的に従ひ之に応ずべき人材を養成すべし」¹⁹⁾を実行に移すため、ロシア語の学校を設立したのである。

東邦協会は、社会に広まっていたロシア語教育の必要性を許容しうる会であり、また東邦協会自体も語学学校設立の必要性があったという要因があいまって「東邦協会露西亜語学校」は、

設立へと進んでいったのである。

4. 東邦協会露西亜語学校 初代校長 高橋健三について

東邦協会露西亜語学校設立に向けた具体的準備は、評議会での協議によって進められていった。初めて議題として上るのは、1891（明治24）年10月15日開催の評議会席上であった。

本邦と露西亜との関係は外交上、兵備上、航海上、貿易上等将来邦人の大に注目して準備す可き所なり、然るに英、佛、獨語等を善する者は其人に乏しいからさるも露語に習へる者は寥寥聞くなければ、露西亜語学校を設置して露語学者を養成す可しといふに在り²⁰⁾

東邦協会理事は、副島種臣、陸實、高橋健三、大井憲太郎、小山正武、志賀重昂、三宅雄二郎、杉江輔人、中橋徳五郎、星亨、稲垣満次郎、肝付兼行の12名で構成されていた。この理事のうち高橋健三が、このプロジェクトを中心となって進めたと推測される²¹⁾。次回からの評議会でも高橋健三により、報告がなされていき、初代校長にも彼が選出されたという経緯からしても間違いのないであろう。

ここで、東邦協会露西亜語学校設立を率先して進めた高橋健三がどういった人物であったのか、そのプロフィールを簡単に紹介してみたい。

1855（安政2）年江戸に生まれ、貢進生に選出され、大学南校（後の東京大学）に進んだが、1878（明治11）年中退し、その翌年官職につく。駅逋局を皮切りに、内務省、農商務省、文部省を経て、官報局長に任ぜられるが、1892（明治25）年には官職を辞任する。その後、『大阪朝日新聞』客員、雑誌『二十六世紀』の編集にもあたるなどジャーナリストとしても活躍する。96年松方正義内閣の書記官長に就任するが、『二十六世紀』在任中の筆禍事件などもあり、97年辞職する。1898（明治31）年7月22日、肺結核のためわずか42歳で病没した²²⁾。

高橋の42年という短い生涯の中で、東邦協会露西亜語学校設立の足掛かりともなった二人の人物との出会いがあった。一人は、陸羯南である。陸羯南は、政府の欧化主義を嫌い国権の伸張を唱える国粹主義者として知られた人物である。この彼と高橋との関係は、1885（明治18）年、高橋が官報局次長在任中に、陸は内閣官報局編輯課長であったという上司と部下の関係から始まったと考えられている。しかし、陸が、新聞『日本』を創刊するにあたっては援助をしたとされており、わずか2歳しか違わない二人にとって、上下関係と言うよりも、思想を共有する同志とも言える存在でもあった。東邦協会の活動に加わったのは、どちらからの呼びかけかは定かではないが、設立当初から、理事として名前を連ねたということは、高橋の積極的な東邦協会活動に、陸の影響が大きな位置を占めていたのであろう。

もう一人が、同じく1889（明治22）年官報局長時代の部下、二葉亭四迷こと長谷川辰之助²³⁾である。1881（明治14）年から四年余、東京外国語学校の露語科に、1885（明治18）年から三か月余東京商業学校に在籍しロシア語教育を受けたという彼から、ノウハウの教示を受けたことは想像できる。特に、東京外国語学校が東京商業学校に合併され、教規が改正され、同級生らが不満をもちながら、退学していく姿をみてきたという経験は、語学教育のあるべき姿は如何なるものかを考えさせる良い機会になったであろう。また、そういった経験を高橋に話したということは十分に考えられる。

この二人の出会いのみが、高橋健三をもって露西亜語学校設立を発案させたとは言いきれないが、高橋の露西亜語学校に対する姿勢には、少なからず彼ら二人の影響を受けたことは否定できない。

5. 活動

東邦協会露西亜語学校で行われたロシア語教育は、どのようなものであったのだろうか。教授方法や使用教科書、その他諸々に関する資料はほとんど残されておらず、『東邦協会報告』に掲載される記事から知るのみである。ここからは、この断片的な記事を紡ぎ合わせてその活動内容を辿っていくこととする。

① 所在地

「十二月廿二日東京府令第五八九號を以て設置の准許を得た」²⁴⁾露西亜語学校は、「神田區錦町三丁目一番地」²⁵⁾の「錦城學校の一二室を僦用する事」²⁶⁾によって開校した。

仮住まいではあるが、錦城学校が選ばれたのには、二つの理由が考えられる。明治 25 年当時、錦城学校付近には、東京商業学校、明治大学、東京物理大学など数多くの学校が開校していた。東邦協会露西亜語学校の規則は、「第七條 授業時間は毎日午後六時より同九時に至る三時間とし内土曜日は午後六時より八時に至る二時間にして毎週十七時間以内とす」、「他學校學生々徒にして本校に兼學せんとする者に限り東脩金を半減とす」²⁷⁾など、ダブルスクールや既に仕事に就いている者が、語学を身につけることが可能であるよう考慮した時間割となっている。地の利もよく、夜間開校に間に合いやすいという点を考慮して神田の地を選定したというのが第一の理由であろう。もう一つの理由として、錦城学校が、矢野龍溪（矢野文雄）によって運営されていた学校ということである。矢野は、『浮城物語』の作品などで知られた南進論者である。また東邦協会の設立当初からの会員ということもあり、東邦協会活動に関しては、良き理解者でもあった。空いている時間の教室を使用することにより安い家賃で、そして固定場所がないという現状を考慮して教室提供を快諾したというのが経緯であろう。但し、順調に開校した露語学校ではあったが、神田の大火により、4 月には成立学園への移転を余儀なくされることになったことを付け加えておく²⁸⁾。

② 運営

経営は、基本的には、一か月 1 円の授業料で²⁹⁾運営する予定であった。しかし、開校よりわずか 5 か月目の収支報告書では、既に収入不足のため、半数近くの比率を東邦協会本体からの補助金に頼っている。普通の事業経営では、本業収入不足ということは到底考えられないことではあるが、それでも月々の授業料を値上げすることもせず、寄付や補助で補填したということは、東邦協会会員の期待の大きさの裏返しかもしれない。期待に関しては、実現したか定かではないが、ロシア公使館から支援の話もあったとの記述もある³⁰⁾。こういった期待の大きさが、収支表の数字にも一端が示されているであろう。

〈表 1〉貸借対照表

収入科目			支出科目		
束修及月謝	149 円 500	54.1	教務幹事手當	175 円 000	63.4
協会補助金	126 円 634	45.9	事務員等同斷	27 円 500	10.0
			教場家賃	31 円 500	11.4
			事務所雑費	22 円 986	8.3
			商業學校共同雑費	17 円 148	6.2
			事務員等年末手當	2 円 000	0.7
	276 円 134	100.0	合計	276 円 134	100.0

(『報告』14、p135)より作成³¹⁾

③ カリキュラム

このカリキュラムがロシア語教育として一般的なものかどうかは不明である。しかし、同時代の英語・支那語教育のカリキュラムを見ても³²⁾同様であったことから、妥当なものであった推察とできる。担当教員の項でも述べることになるが、東京外国語学校で教鞭を振っていた3名が指導にあたったということは、東京外国語学校のカリキュラムを踏襲したことは十分に考えられ、官立学校と比較して遜色のない授業を受けられるというメリットがあったのであろう。

〈表 2〉カリキュラム

第一年		第二年	
前期	後期	前期	後期
讀法	文法	會話	會話
習字	會話	作文	作文
書取	作文	譯讀	譯讀
會話	譯讀	和文露譯	和文露譯

(『報告』8、p.60)より作成

④ 担当教員

東邦協会の期待を担って、幸いにも著名な市川文吉、古川常一郎、藤堂紫朗の三名の招聘に成功し、授業を行わせることになった。『東邦協会報告』の記載によれば、「市川、古川兩君は十数年間露京に留學志、帰朝後は舊外国語學校露語の教授なりき、又藤堂君も亦舊外国語學校に露語教員とし、三君か露語に精妙なるは夙に世の熟知する所なれば今此に賞揚を待たす」³³⁾と紹介されており、三名ともが、東京外国語学校の露西亜語科の休止によって経験を生かせる場を失っていた。好機の求めに応じて、露西亜語教育に専心し、後進の育成を目指したものと推測される。市川、古川、藤堂三名ともこの時期の様子を記載したものはない。しかし、東邦協会露西亜語学校閉鎖後、東京外国語学校に復職した彼ら三名の活躍を見れば、この時期の活動は想像に難くない。

⑤ 教科書

東邦協会ロシア語学校で使用された教科書の詳細に関しては全く明らかにされていない。しかし、国立国会図書館に『露語階梯 第1編』(ロゴ カイテイ.1) という一冊の本が保管されている。藤堂紫朗と古川常一郎によって編集され、明治25年3月に出版された本である。階梯という語が示すように、ロシア語の入門書、手ほどき書として出版されたものであり、出版物を教科書として使用したことは十分に考えうる。ここでは表紙と目次と奥付のみであるが、紹介しておきたい³⁴⁾。



〈図1〉『露語階梯 第1編』表紙、奥付、目次

⑥ 生徒募集状況・入学者

1891(明治24)年11月19日付『讀賣新聞』でも「東邦協会がロシア語学校の設立を決める語学研究へ来年1月開校、会費50銭」と取り上げられたように、広く人々に紹介され、多くの生徒が集まった。「露西亜語學校は創立以来未だ二箇月にだも充たされとも、生徒の數已に七十八名に至れり、今ま其姓名を左に掲ぐ」³⁶⁾とあり、いかに多くの学生が集まったかがわかる。メーチニコフは「東京のロシア語学校は、(中略)あらゆる年齢にわたる百五十名ほどの

生徒をかかえることになった」³⁷⁾、東京外国語学校の露西亜語科も人気とあったと記述しているが、実際には14名の学生しかおらず、全学科で最低比率だったとのことである³⁸⁾。東邦協会露西亜語学校の78名という数字は、過大評価ではなく、確かに多くの生徒が集まった人気の語学学校であったのである。

⑦ 卒業者

入学時78名だった生徒は、2か年という時を経て、残ったのはわずか8名であった。そのうち及第し、1894(明治27)年1月に卒業式に出席できたものは、大谷丑之助、平島謙三、石田虎松、森本義臣の4名³⁹⁾のみであった。実に74名もの脱落者を排出するという結果になってしまった。例えば入学当初に名前を連ねている「高見亀」は明治24年から時事新報社に入り、校正より修業して記者となった人物である⁴⁰⁾。本来業務との両立は難しかった、ロシア語に関しての興味がなくなった、金銭的に継続不能となったなど、理由はいろいろ考えうるであろうが、いずれにせよ、卒業時に名前を連ねることはできなかったのである。

苦難を乗り越え卒業式に出席することができた4名を前にして、副島種臣は次のように祝辞を述べる。「我國民の相往來頻繁なると國際問題の相緊要急劇なると露西亜語の須用なる誰れか亦其然を疑はん」「東邦協會の規模は雄偉宏遠なり英雄能く英雄を識る操と使君との談柄のみに非ず目前の小利を見て一朝事足れりとす余輩の取らさる所なり」⁴¹⁾と。たとえ人数が少なくとも、熱弁を振ったのは、東邦協会露西亜語学校設立が失策でなかったこと、また東邦協会活動が有益であることを確認する作業でもあったのである。

6. 露西亜語学校の衰退

頻繁に『東邦協会報告』に登場していた露語学校も1894(明治27)年2月発行33号「本會附屬露西亜語學校生徒卒業式」の記事を最後に一切掲載されなくなる。そのことは即ち東邦協会露西亜語学校そのものの終焉を意味していた。人々の期待を一身に背負い旗揚げした露西亜語学校であったが、わずか4人の卒業生を出すのみで幕を閉じるという結果に終わってしまった。確かに設立当初は、ロシアに対して多いに関心をもっていたことは前述したとおりである。雑誌『東邦協会報告』で盛んに記事として取り上げ、切迫した会の財政から資金を捻出してまでも、露西亜語学校を運営したということは、その当時の日本の社会の流れに沿った東邦協会運営方針であったということには違いない。しかしながら方針転換を余儀なくされたのはなぜであろうか。

第一に考えられるのが、ロシア語の用途が少なくなったということである。時代は少し遡るが、メーチニコフが「ロシア語を修得してみても日本人学生たちには英語、仏語科の生徒のように前途は明るくない。ロシア語の勉強はほとんど魅力あるものではなかった・・・」⁴²⁾と述べたように、在籍者はもとより卒業者さえもロシア語を生かす場所は少なかった。東邦協会自体も同様に「露西亜語の需用は、今日目前に於て未だ近効を見ざるを以て生徒の父兄、或は之に倦み、學資を給せず若しくは、生徒其人亦之を繼續貫徹すること能はざる事情ある等」⁴³⁾と分析している。確かに、籍を置いた者の中に、名を挙げたものはごく少ない。強いて挙げるとすれば、夏秋亀一、和泉良之助、石田虎松の三人くらいである。夏秋は後藤新平の腹心とし

て日露政治折衝の裏面で重要な役割を果たしたということ⁴⁴⁾、和泉はウラジオストック在留日本人向け新聞『浦潮日報』の発行で⁴⁵⁾、石田は尼港事件で自決したということ⁴⁶⁾で、知られている。しかし、彼らが真に活躍できたのは、日露戦争期以降になってからである。対局が再びロシアへと向かうのは時を待たなくてはならなかった。

第二に、東邦協会のロシア語学校設立が当初の設立趣旨と乖離しており、無理があったということである。「此の時に当り、東洋の先進を以て自任する日本帝国は、近隣諸邦の近状を詳らかにして実力を外部に張り、以て泰西諸邦と均衡を東洋に保つ計を講ぜざる可らず」⁴⁷⁾という一節があり、「東洋の覇権」を握ろうとする意思が東邦協会の趣旨には含まれていた。東洋の地理、外交、兵制など多くのことを理解することは、東洋を制する第一歩となる、その為には、語学を身につける必要があるということが根底にあった。「東邦協会發兌の理由」にも「世に英佛の語を解するものは多し、而して清韓の語を解するものは甚だ少し」⁴⁸⁾とある。この基本方針からすると、本来は、朝鮮語・支那語の学校設立が自然の流れであろう。それが露西亜語学校設立という別の方向に進んでしまったということが、東邦協会内で問題になったということは十分考え得る。その帰結として、継続より廃止へと向かわせる結果になったのであろう。

7. おわりに

以上、東邦協会露西亜語学校の実態について実証的に考察してきた。前述したように露西亜語学校は、高橋健三、矢野龍溪、副島種臣、東邦協会理事ら、多くの人物が、学校の運営に尽力し、多くの費用を投入した一大事業であった。その結果、教育機関としては、教育理念、カリキュラム、教師陣など、何一つとして、官立学校と比較しても遜色のないものとなった。その半面で、卒業生はわずか4名で、しかも、歴史上に現れる人物をほとんど排出することができなかったという期待に反する結果に終わった。学校運営に何ら問題があったわけではなく、ひとえに時期が悪かったとしか言いようがない。日に日に朝鮮における宗主権を強めていく清国、未だ不安定な状態な朝鮮⁴⁹⁾にどう対応していくかという当面の問題にベクトルが変化しただけである。そしてその後再びロシア語の必要性が高まることになる日露戦争前後までは、期間があり過ぎた。時期尚早だったのである。しかし、東邦協会露西亜語学校は、一時期確かに存在した。歴史の長短は関係ない。設立したというところに理念があるはずである。財政上のひっ迫を押しつけてまでも設立をしたということは、東邦協会の方針が一時期「ロシア重視であった」ということを裏付けるものである。時局の要請に呼応し、歴史の一ページを刻んだことには違いない。この時期の東邦協会の対外認識がいかなるものであったのか、そして広義には、近代日本の対外認識の一面を反映する活動ではなかったと考えられる。

註

- 1) 1891(明治24)年11月19日付『読売新聞』「東邦協会がロシア語学校の設立を決める 語学研究へ来年1月開校、会費50銭」、1892(明治25)年1月8日付『国民新聞』「東邦協会ロシア語学校は有為の士を陶出するを期待する」など数紙で紹介されている。
- 2) 明治維新直後ではあるが、メーチニコフ『回想の明治維新』岩波文庫、1987、「東京外国語学校魯語科とナロードニキ精神」『ロシア語ロシア文学研究』第15号により、ロシア語教育に関して多少伺い知ることが

- できる。
- 3) 安岡昭男「東邦協会についての基礎的研究」法政大学文学部紀要(法政大学文学部 / 法政大学文学部 編)、(通号 22)、1976、pp.61-98。
 - 4) 安岡昭男「東邦協会と副島種臣〔含 東邦協会「報告」「会報」寄稿目録抄、東邦協会会員抄〕政治経済史学 [ISSN:0286-4266] (日本政治経済史学研究所) 169、1980.6 pp.1-12。
 - 5) 狭間直樹「初期アジア主義についての史的考察(5)第三章 亜細亜協会について、第四章 東邦協会について」東亜 (Asia monthly.) [ISSN:0387-3862] (霞山会) 414、2001.12 pp.56-75。
 - 6) なお、同時代ではないが、ニコライ堂学校、函館露語学校のようなロシア語研修機関はいくつか存在したが、今回、比較検討はできなかった。
 - 7) 『東邦協会報告』第1号、「事業順序」、pp.5-6。「会事報告」p.35。
 - 8) 筆者の調査では、日清戦争開始以前の最高人数は、明治27年6月時点で1238名である。但し、増減をカウントして調査したものであり、多少の誤差があることはご容赦願いたい。
 - 9) 1891(明治24)年5月～1894(明治27)年7月は『東邦協会報告』、1894(明治27)年8月～1914(大正3)年7月は『東邦協会会報』と名前を変えて雑誌は発刊された。
 - 10) 日清戦争開始とともに、露西亜語学校は消滅に近い形になってしまったので、その点から、明治27年5月までの『東邦協会報告』記事のみを抜粋する。
 - 11) 一ツ橋帝大とすることから、神田一ツ橋の旧開成所跡の南校(開成学校のちの東京開成学校)であると思われる。
 - 12) 大石正巳のほか、末永純一郎は「朝鮮の現制並に日本の関係」という演題で二時間を越える講演をし、熱弁のため夜半に及んだため、当日予定されていた稲垣満次郎の講演は、日を改めて開催することとなった。27日再度、帝大講義室で開催された講演会も、前回同様200余名の聴講者で会場が埋め尽くされた。「東洋の大勢上大島と台湾孰れか優れる」という題目で講演した稲垣満次郎は、三時間を越える時間を費やして、独自の主張を展開した。
 - 13) 副島種臣は、会長職を辞退したため、副会長職となっているが、実質の会長であった。
 - 14) 副島伯大石正巳氏の演説を憎む 過日大石正巳氏が東邦協会に於て東洋問題に関する一場の長演説をなし全然稲垣満次郎氏の東方策に反対し最後に魯国は我が商業の敵、平和の敵、□た文明の大敵なりとまで絶叫したるは頗る痛快なるが如くなれども此の演説に就いては種々の非難も亦た□からざるが当日其の演説を傍聴せられたる副島伯の如きも大石氏はよき豪傑にして其の演説も甚だ面白く彼の稲垣氏の意見と大いに相違し居れども各々一己の見識を立てたるものゝ何れが実際に当るやは予め知る所にあらず唯だ大石氏の演説中魯国を罵倒せし一言は少しく無遠慮を云はざるを得ず氏たとへ異心斯く信ずるにもせよ東邦協会の席上に於て此の言をなすは如何にも面白からざる事なり元来東邦協会は種々の分子より成立てるものなれば之が為に随分迷惑をる人もあるべしと語り居られし由(『読売新聞』1892(明治25)年2月27日付)
 - 15) 1888(明治21)年、山県有朋は「軍事意見書」を起草する。この中で、将来東アジアにおける英露対立は必死であり、シベリア「鉄道竣工ノ日ハ、即チ露国ガ朝鮮ニ向テ侵略ヲ始ムルノ日」との想定の下で、「兵備完整」を「最大急務」としなければならぬと主張した。このとき始めてシベリア鉄道の建設によってロシアが脅威になると指摘し、「我国ノ政略」は「朝鮮ヲシテ全ク支那ノ関係ヲ離レ自主独立ノ一邦国トナシ以テ欧州ノ一強国事ニ乗シテ之ヲ略有スルノ憂ナカラシムル」と朝鮮の自主独立を欧米列強に承認させることにあると主張しながら、日本が朝鮮を保護するとの意図を垣間見ることができるとの建議でもあった。
 - 16) 天津事件は、ロシア皇太子ニコライ二世が、滋賀県大津市訪問の際、警備にあっていた津田三蔵によって、突然切りつけられ負傷した暗殺未遂事件であるが、大審院の児島惟謙が、三権分立を重視し、刑法に準じた判決をだしたことでも知られている。
 - 17) 野中正孝編『東京外国語学校史』2008.11、不二出版。
 - 18) 興亜会に関しては、黒木彬文「興亜会の成立」政治研究(九州大学政治研究会)(通号30)、1983.03、pp.73-110。黒木彬文「興亜会の基礎的研究」近代熊本(熊本近代史研究会)(22自由民権特集号)、1983、pp.175-216が詳しい。
 - 19) 『東邦協会報告』第1号、「事業順序」、pp.5-6。
 - 20) 同上第6号、p.100。
 - 21) 前掲、安岡論文「東邦協会についての基礎的研究」にも同様の指摘がある。
 - 22) 『内藤湖南全集 第2巻』1971、筑摩書房。白井勝美編『日本近現代人名辞典』2001.7、吉川弘文館。
 - 23) 桶谷秀昭『二葉亭四迷と明治日本』、1997.3、小沢書店。
 - 24) 『東邦協会報告』第8号、p.60。
 - 25) 同上 第8号、p.60。
 - 26) 同上 第7号、p.95。
 - 27) 同上 第7号、p.95。
 - 28) 四月十日神田の大火は我露西亜語学校をも将みて烏有に歸せしむ由て同區駿臺鈴木町十三番地成立學舎内に假教場を設け、同十三日より授業すること舊の如し(『東邦協会報告』第12号、p.110)。
 - 29) 第二十條 本校授業料は一箇月金一圓とす。但し本會々員及他學校學生々徒にして本校に兼學する者は一

- 箇月五十銭とす。一學校の經費は總て學校の収入より支辨し萬一不足あるときは協會資金より補助する事
 (『東邦協会報告』第7号、p.95。)
- 30) 「露國代理公使の來訪」『東邦協会報告』第9号、p.97。
 - 31) 東邦協会自体の収支報告書、月々の計算書と数字は矛盾するが、「露西亜語學校収支決算表」を正とした。
 - 32) 邵 艶「近代日本における中国語教育制度の成立」神戸大学発達科学部研究紀要 12(2)、pp.371-400、2005.02。
 - 33) 『東邦協会報告』第14号、p.135。
 - 34) 副題にも「東邦協会付属露西亜語學校教師のため」とあり、東邦協会露西亜語學校で使われたことには間違いないであろう。なお、ロシア語和訳に関しては、愛知淑徳大学メディアプロデュース学部大西誠教授にご教示いただいた。
 - 35) 国立国会図書館蔵 近代デジタルライブラリー『露語階梯』pp.1-2、26より転載
<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/862125>
 - 36) 「生徒名簿」『東邦協会報告』第10号、pp.113-114。
 - 37) メーチニコフ『回想の明治維新』岩波文庫、1987と野中正孝編『東京外国語學校史』2008.11、不二出版、p.89。
 - 38) 野中正孝編『東京外国語學校史』2008.11、不二出版、p.90。
 - 39) 『東邦協会報告』第33号、p.106。
 - 40) 宮武外骨・西田長寿著『明治大正言論資料 20 明治新聞雜誌関係者略伝』、みすず書房、1985.11、p.130。
 - 41) 『東邦協会報告』第33号、p.107。
 - 42) メーチニコフ『回想の明治維新』岩波文庫、1987、p.284、「東京外国語學校魯語科とナロードニキ精神」『ロシア語ロシア文学研究』第15号。
 - 43) 『東邦協会報告』第33号、p.106。
 - 44) 十川信介「解題」『近代文学研究資料叢書(5) 坪内逍遙・内田魯庵編 二葉亭四迷』所収、日本近代文学館、1975、p.19。
 - 45) 松山邦祐『和泉良之助一『浦潮日報』創立者』、1981.3、サンケイ新聞生活情報センター。
 - 46) 石田虎松は大正時代の外交官。モスクワ大使館勤務などをへて、大正7年シベリア出兵で日本軍が占領中のニコライエフスク(尼港)の副領事となる。9年パルチザンの包囲に、軍とともに奇襲攻撃をかけて反撃をうけ、同年3月13日妻子を殺して自殺した(尼港事件)。(『講談社日本人辞典』2001.12、講談社)
 - 47) 『東邦協会報告』第1号、「東邦協会設置の趣旨」pp.1-4。
 - 48) 同上 第1号、p.8。
 - 49) 甲午農民戦争は直後の1894年春ごろより内乱状態となった。